聊齋志異

卷五

聊齋志異 小翠之卷 目次

聊齋志異

第五卷　小翠之卷

昭和二十六年十一月十日初版印刷
昭和二十六年十一月十五日初版發行
定價二〇〇圓

譯者　柴田天馬
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
發行者　小林茂
東京都新宿區市谷加賀町一ノ一二
印刷者　村尾一雄
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
（大阪市北區樋上町四五）
發行所　株式會社　創元社
電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六二
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

印刷　大日本・製本　鈴木
萬一落丁・亂丁がありましたら取替へます

餓鬼	六〇
葛巾	六四
湯公	七七
錢流	八〇
鬼妻	八二
小翠	八四
河間生	一〇〇
醫術	一〇二
阿纖	一〇六
嘉平公子	一一六
蛙曲	一二〇
詩讖	一二二

夜明 一二六
捉狐 一二七
焦螟 一二九
鼠戲 一三一
賈奉雉 一三三
趙城虎 一四五
鳳陽士人 一四八
靈官 一五五
斫蟒 一五七
鴉頭 一五八
書癡 一七〇
水災 一七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

酒友　一七九
胡四姐　一八三
梁彥　一九〇
樂仲　一九一
保住　二〇三
翩々　二〇六
瞳人語　二一四
勞山道士　二一八
王子安　二三五
劉全　二三〇
狐嫁女　二三五
聶小倩　二四一

聊齋志異

小翠之卷

王桂庵

王穉は字を桂庵といつて、大名府の世家の子だつた。あるとき南方に游をして、江岸に泊舟をしてゐると、隣の舟に榜人の女がゐて、履に繡をしてゐた。王はその韻絶た風姿を、もう久いあひだ窺瞻いてゐるのだが、女は覺かないらしく、しきりに針を運んでゐた。王は故と女に聞えるやうに、洛陽の女兒對門に居る、(一)といふ詩を朗吟んだ。すると女は其れが自分の爲だと解つたのだらう、略と首を擧げて斜瞬たが、すぐまた俛首いて、故のやうに繡をするのであつた。

その愛らしさに王は神志益馳れ、遙から一枚の金錠を投げてやると、女の襟下に墮ちたが、女はそれを拾つて棄てゝしまつた。まるで金だといふことを知らないものゝやうである。

女のすてた金が岸の邊に落ちたのを、王は拾つて歸つてから、又た金の釧を擲げてやると、今度は女の足もとに墮ちた。しかし女は業をして顧もしなかつた。

無何く榜人が他から歸つてきたので、王は釧を見つけて研詰はしないだらうかと、心甚急た。すると、女は從容して雙鉤の下に覆蔽てしまつた。そのうちに榜人は纜を解き、流れに順つて逕去つた。

王桂庵
馬纓花下
竹籬斜夢境
尋來路不差
載浮美人江
上去蓄停撓
豪浪如花

王は心情喪悶して癡のやうに凝と座つてゐた。王はその時、偶を娶つてそれが喪んだばかりだつたから、すぐ媒をたのんで隣の舟にやり緣談を定めなかつたことを後悔した。舟人たちに詢ねてみても、女の父が何といふ姓か、並も識らなかつた。王はあきらめきれず、舟を返して急にあとを追はせ、目のとゞく窮り見わたしても、何へ往つたか知れなかつた。

王は不得已ぐ、また舟を返して南にゆき、務が畢んで北に旋るとき、又た沿江を細かに訪ねてみたが、並に音耗が無かつた。

家に至いてからの王は、寢るにも食ふにも、女のことが縈念つてゐた。踰年復た南方にゆくことになつたので、江際の舟を買ひ、焉を家のやうにして日々行つてゆく舟に細敷け、往き來をする舟の帆や楫を皆り熟えるほどになつたが、寔の舟ばかりは殊も渺かつた。そして半年ほど居るうちに、貲が罄つて歸つて來た。

行つては思へ坐ては想ひ、少しのまも置れることが不能のである。

一夜の夢で、江ぞひの村にゆき、數かの門の前を過ぎてふと見たのは南むきの柴扉のある家で、門内には疎な竹籬がゆつてあつた。王はそれを亭園だらうとおもつたので逕となかに入ると、一株の夜合(一)の樹に、紅い絲のやうなはなが滿樹さいてゐた。王はひそかに、詩にある、門前一樹馬纓の花といふのは此其是矣と念ひつゝ數武か過ぎて又光潔な葦笆を入り、見ると、北むきの家は三楹まぐちで、雙扉(二)がかたく闔めてあつたが、南に有る小さな舍は、紅蕉が窓を蔽つてゐるので、探身してそつと窺(三)くと、椸架(四)が當窓においてあつて、其の上に畫のついた裙が冒つてゐた。王は閨闥と知つて愕ろいて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

郤退いたが、中では已う覺いたとみえ、奔いで客を瞰に出た人が有つた。粉黛をした顏を徵し呈したのをみると舟中の人であつた。

王は出非望の喜びに、

「亦り逢ふ期がありましたね！」

と曰つて狎就ようとしたとき、女の父が歸つて來た。

と、倏忽驚覺めたので、始めて夢と知つたのであるが、そのときの景物が歷々と目の前に在るやうなので王は深くそれを祕密にしておいた。人に言すと、佳い夢を破るだらうと恐したからである。

その後一年餘りして王は鎭江にいつた。そして城南にゐる徐といふ太僕、それは世の誼だつた人に招かれたので、馬のあがきに信せてゆくうちに、つい悞つて小さな村に入つたが、道の景色をみると、なんだか生平に所歷つたところに髣髴のやうである。よく見ると、一る門の內に一樹の馬纓があつて、その景象が夢宛然なのだ。王は駭極き、投鞭て逕となかに入つたが、物といひ色といひ夢とすこしもちがはなかつたから、再おくに入つてゆくと、房舍の數まで一く夢の如だつた。

夢既驗なのだ、とおもつて王は復うなんの疑ひもなかつた。ずん／＼南の舍に趨いだ。果して王のおもつたとほり、舟中の人は其の中にゐて、王の姿を遙見ると驚いて起ちあがつた。そして以扉自障て、叱るやうに問ねた、

「何處の男子です」

王は逡巡ひ間ら、猶り是れは夢ではないかと疑ふのであつた。

女は王が歩履漸近のを見て闞然と戸を扃めた。王は、

「釧を擲げた者を卿は憶えてゐないんですか？」

と曰つて相思之苦をこま〳〵と述べてから、夢の微をはなすと、女は扉を隔てゝ王の家世を審いた。王が具く道つてきかすと、女は曰つた、

「官の裔でいらつしやるんだから、必と中饋に佳いかたがおいでせう。妾なんかに用はないはずよ」

王は曰つた、

「卿の故がなければ、固已久に娶つてゐたでせう」

女は曰つた、

「果におつしやるとほりなら、君のお心が知りますわ。妾の情は、父や母にはいへませんから默つてゐますけれど、やはり嫁にいけといふ兩親の命に方いて、もう數家も絶りました。金の釧はちやんと猶だ在りますの。情の鍾い方なら必とお耗問が有るはずだとおもつてゐましたわ。父も母もいま外戚に適つてゐて行且至ところですから、あなた姑づ退つて、冰を倩んで委禽をもつてこさせれば、きつと無不遂りますわ。若し禮にかなはないやうなことで、耦に成らうなんて望なら、それは用心左矣」

王が倉卒で出てゆかうとすると、女は遙かに呼ふのであつた、

「王さん！　妾は芸娘、姓は孟氏、お父さんの字は江籬！」

王は諾してこゝろに記め、そこを出て徐をおとづれたが、酒筵を罷ると、早々に返つて、江籬に謁ひにいつた。翁は籬の下に席を設けて王を逆へた。王は自分の家閥を道してから、來意をつげ、聘として百兩の金を納した。すると翁は、

「息女はもう字をさせましたよ」

といふのであつた。

「聘を待つておいでになるといふことを、訊之甚確てきたんです。何うしてさう深くお絶になるんです」

「ほかの申しこみを諾したのは適間で、誑ではありません」

王は神情倶失して別れて返つたが、翁のいつたことが信か否かわからないので、當夜輾轉をしておもひなやんだ。

王は向に、事情を太僕に告して力を借らうかとも欲つたのであるが、榜人の女を娶りたいのかといつて先生に笑はれるのを恐れて云はずにゐた。しかし、今は事情が急つてゐるし、媒をたのむ人も無かつたから、質明ると太僕の家に詣て、實の告をした。すると太僕は曰つた、

「あの翁はぼくと有瓜葛になるのだ。ぼくの祖母の嫡孫なんだからね。何ぜもつと早く言はなかつたのだ」

で、王は隱してゐたわけを吐けた。すると太僕は疑つた、

「江籬は固から貧つてはゐるが、操舟をしたやうなことはない。なにか悞では毋いかね」

といつて、子の大郎を遣り、孟のいへに詣つてはなしをさせると、孟は、
「僕は空匱だが、賣りかひの婚はしないのだ。公子が金をもつて自分で媒にきたのは、僕が必と利の爲に動くと思つたのだらう、と涼へたので、附爲婚姻をしなかつたのだ。しかし、先生の命を蒙けたのだから必無醋謬からうと思ふ。たゞ女は頑でな。嬌愛れてるのを頗恃て好な門戸のまうしこみさへ拗郤けるやつだから、與商榷してみて、他日で、遠くへ嫁にやつたなどと怨まれないやうにしなければ不得」
と曰つて座を起ち、しばらく奥に入つてゐたが、すぐ返つてくると、拱手をして、
「一如尊命です」
と曰つた。大郎は期を約して孟に別れ、そのとほり復命したので、王は盛な禽妝を備へて孟家に納め、太僕の家を假館て親迎の禮を成せた。そして三日すぎてから岳に辭をして北に歸つた。
夜、舟の中に宿ながら、王は芸娘に問いた、
「向か此處で卿に遇つたとき、どうも舟人の子の類ぢやないと疑つたのだが、當日舟で何處へいつたんだね？」
「妾の叔さんの家が江北にあるんで、扁舟を借りて省視にいつた偶なの。妾のうちは僅と可自給だけだけれど、儻來いのにもらつた物なんか、頗不貴視わ。かへつて君が屢々金や貲で人の心を動かさうとなさるのは双瞳如豆だとおもつて笑つてゐたの。初めに聲を聞いたときは風雅な士だといふことが知つたけれど、あとでは又、あたしを蕩な女だとおもつて挑はうとする、儇薄子ぢやないかと

いふやうに疑ひもしたんだわ。父に金の釧でも見せたら、君は死んでも行き場が無いくらゐはづかしいおもひをするところよ。才子を憐がつた妾の心、切だとおもは否？」

王は笑しげに曰つた、

「卿は固ん甚く黠さ。然し亦り吾の術に墮つたんだぜ」

「それは何んな事？」

が、王はあとを言はなかつた。をんなは又た固に詰ねた。すると王は、

「家門は日に〳〵近くなるし、此のことは、やはり不能終秘いだらうな。卿に實のことを告ふがね。我の家中には固と妻がゐるんだ。呉尚書の女さ」

けれどもまだ芸娘が信用しないのをみて、王は故と莊其詞く、實らしく話してきかせた。

芸娘の色がだん〳〵變つた。默つたまゝで移時たつた。

遽、いきなり起つて奔出した。王は履を躧けたまゝで追ひかけたが、もう江中に身を投げたあとであつた。

王は大聲で呼びたてた。あたりの諸船は驚き鬧いだ。

夜色昏濛で、惟だ滿江の星點が、しづかにうかんでゐる而已だつた。

悼痛終夜す王であつた。江に沿うて下つてゆき重價をだして芸娘の骸骨を覓したが、見たといふ者さへ無かつた。

王は邑々く家に歸つて、憂み慟くばかりであつた。そして翁が女を視に來たとき、無詞可對いのに

苦しみ、姉婿が河南の官吏になつてゐるので、駕を命けて河南に造つた。

一年餘りを河南にすごしてから歸つてくる途中で雨に遇ひ、ある民家に休裝みながらあたりを見まはすと、房や廊がひどく清潔で、一人の嫗さんが廈間で兒を弄してゐたが、兒は王の入つてきたのをみて、ひどく求援抱るのであつた。王は怪にもおもつたし、それに可愛い秀婉な兒だつたから、攬置膝頭てやると、嫗さんがいくら喚んでも、もうそつちへは不去かつた。

少頃すると雨が霽れたので、王は兒をだき擧げて嫗さんに付し、堂を下て趣裝ぐと、兒は、

「阿爹去矣！」

と曰つて涕くのだつた。嫗さんが耻かしがつて叱つても泣き止まないのだ。嫗さんは強に抱へて去つてしまつた。

王は治任のできるのを坐待つてゐた。と、麗いひとが屏風の後ろから兒を抱いて出てきた。みると、それは芸娘だつたので、詫異んでものもいへなかつた間である。

「負心郎！（一三）此一塊肉を遺して、焉置之んです」

と芸娘が罵るのをきいて、王はそれが自分の子と知り、酸來刺心やうなきがして、芸娘の往迹を問く暇もなく、先づ前に言つたのが戯であることを矢日自白つたのである。芸娘はそれをきくと、怒つてゐたきもちが反つて悲しさがこみあげてきた。ふたりは相向つて涕零たのである。

是れより先のことだが、この第の主の莫翁は、六旬になつても子が無かつたから、嫗さんを携れて南海にお朝に往つた歸途、江岸に泊をしてゐると、芸娘が隨波下てきて、翁の舟に觸つた。翁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.